



第5回和泉市総合教育会議

令和6年12月26日(木)

(1)学校のICT活用について

- ① 第4回総合教育会議のふり返し
- ② 学校教育情報化推進計画(案)について

(2)本市における生徒指導上の課題の対応について(非公開)

(1) 第4回総合教育会議のふり返り

学校教育情報化推進計画

- ・学校教育の情報化の推進に関する法律(R1公布・施行)の第9条において、地方公共団体は学校教育情報化推進計画の策定が努力義務
- ・和泉市内の学校教育の情報化に関する基本的な方針や施策の方向性を示すために、策定予定。

計4つの観点を整理

- 1 授業がしやすい、受けやすいICT教育環境づくり
- 2 子どもたちの学力向上、資質向上につながる教材の提供
- 3 時代を先取りした授業スタイルの教員への助言、ICTが不得意な教員への支援
- 4 教員の働き方改革に資する展開

▼▼▼▼ 第4回総合教育会議では①の一部と②④について検討 ▼▼▼▼

1 授業がしやすい、受けやすいICT教育環境づくり

ウ) 教室用ディスプレイのプロジェクタや大型モニターへの更新を検討。

将来の姿として望ましいイメージ

★榎尾学園のような天吊りのプロジェクターによりホワイトボードに投影する形が理想

★上記の形は、費用面もあり、小中一貫校化、大規模な内部改修時を基本とし、

それまでの暫定措置として、電子黒板等、大型モニターで

「投影したものに書き込める」「画面の大型化」を暫定的に実現

※移行時期については今後、具体内容を整理し、調整



榎尾学園



黒板にホワイトボード貼付け+プロジェクタイメージ



電子黒板イメージ



黒板に直接映写できるプロジェクタ

2 子どもたちの学力向上、資質向上につながる教材の提供

ア) R7年度のGIGA端末更新に際し、利用するアプリの精査

イ) GIGA端末に導入するアプリの利活用推進策の整理

- 小学校
- AIドリルではなく、紙ドリルやより安価なデジタルドリルを活用しながら、さらなる授業改善を進め、学力向上をめざす
 - R7年度は、デジタルドリル「タブドリLive!」を活用
- 中学校
- 中学校においては、継続してAIドリルを活用し、授業改善と学力向上をめざす
 - R7年度から2年間、AIドリルを予算計上

4 教員の働き方改革に資する展開

ア) 教育データを活用したダッシュボードの構築

学校 出席情報、成績(学力情報)をはじめとした各種教育情報が存在

個別アプリ・システムで管理され未集約

市長部局 児童・生徒の保護者に係る各種情報が存在

現在、教育と福祉の連携としてデータ連携し、AI分析を用いたスクリーニングから支援につなげる事業を実施中。その中で、生徒指導、家庭支援関連のダッシュボードの作成にすでに着手

今後、これらのデータを連携、共有できるダッシュボードの構築を進め、教職員の働き方、効率的な業務推進につなげる

イ) 学習評価や成績処理、調査統計等への回答でのさらなる事務軽減

紙媒体で行っている調査や、懇談会の調整をGoogle フォームやGoogle カレンダーの機能を使用しデジタル化を推進。またtetoruの継続的な利用をつづけ、ペーパーレス化を推進。

クラウドを活用し、教材の共有(Izumi eシェアリング)をより充実させ、ヒントを得ることや、教員同士の情報共有をより容易に実現。

授業支援アプリ等の活用で、作成した教材を印刷することなく配付し、印刷業務の減少が可能

ウ) 生成AIの利用でさらなる業務負担軽減

- めざす姿
- 小テスト等の作成にかかる生成AI技術の活用
 - 教員が利用できる環境の整備
 - 子どもには生成AIの留意事項等は伝えつつ、利用については慎重に検討

第4回総合教育会議のふり返り

意 見	回 答
<p>資料5 ページ目の意見部分（端末の活用は、今までの集団学習から個を大切にする学習への転換時期。全員の端末の回答を画面に映し出したり、子ども一人一人の進捗状況を確認できるなど、インタラクティブなことができるようになることで、子どもたちの学力差が明確になり教育の強化が可能になる。）について、インタラクティブにすることで個々の学力差が明確になり、教育の強化が可能になるということも間違いではないが、まずは多様な考え方が見える化され、考え方の違いに気づき、豊かな考え方が共有できるという視点が必要。</p>	<p>質問・意見は前回議事録から抜粋している。 本日いただいた意見は、改めて第5回総合教育会議の資料で対応する（当該ページ）</p>
<p>6 ページ目の意見部分（「教員が自分のスキルに見える化をし、ステップアップできるよう、スキルシートを作るのもいいのでは。」「ICTの活用が苦手だからということで教員が避けるのではなく、教員の意識改革をし、全体のレベルアップを図っていただきたい。」）について、ICT支援員が頑張れば活用が進むようにも読み取れるが、ICT支援員の人数も限られていることから、教員が自ら率先して支援できるよう、教員の中で推進員を決めるなどしていかないと、活用は進んでいかないのではないか。 前提条件として、ICTのスキルは、教員として必要なスキルであることを付け加えたい。</p>	

1. 授業がしやすい、受けやすいICT教育環境づくり

ウ)教室用ディスプレイのプロジェクタや大型モニターへの更新を検討。

質 問	回 答
<p>榎尾学園では、プロジェクタをどのように授業で活用しているのか。また、子どもや先生方の反響はどうか。</p>	<p>ホワイトボードにプロジェクタで教科書や子どもから提出されたノートの映像を映し出し、その映像の上からマーカーで意見を書き込むなど、視覚的にわかりやすい授業を展開している。子どもたちは、これまで以上に意欲的に学習に取り組んでいるとともに、教員もすぐにプロジェクタを使った授業に慣れ、積極的に活用している。</p>
意 見	
<p>○ 現在、各学校に設置している50インチの画面では小さい。 ○ （電子黒板の場合）液晶は光の反射により見えにくくなることがあるので、黒板に直接投影する方法についても検討してほしい。 ○ モニターを大型化するのは非常にいいこと。どのような形式がいいか今後整理していただきたい。 ○ 現在、教室に設置している画面は小さく、座席が後ろの子どもが見えているか疑問。導入までの間は、置き型のプロジェクタとホワイトボードで対応するなど、できることをしていけばいいのではないかと。 ○ ディ스플레이の整備においては、教室内で走り回ったり、物を投げたりする子どもたちがいることを想定して、ディスプレイが倒れてこないようにするなど、子どもたちの安全面も考慮しながら検討いただきたい。</p>	

2. 子どもたちの学力向上、資質向上につながる教材の提供

ア)R7年度のGIGA端末更新に際し、利用するアプリの精査
イ)GIGA端末に導入するアプリの利活用推進策の整理

質 問	回 答
<p>ICT教育の一番のメリットは、いろいろな状況にある子どもたちに個別最適な教育ができること。不登校や病気で学校に来れない子どもに授業を配信するなどの仕組みが必要。現状と考えがあれば聞かせてほしい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教室に入りにくい子どもたちへのICT活用については、コロナ禍にGIGA端末を導入し、家と学校をオンラインでつなぐ授業の整備を始めてきた。現在でもリアルタイムで授業を配信し、家で見ることができるようになってきているが、家にいる子どもが質問し、返答できるようなインタラクティブな取り組みができていない学校がある。 ○ 次年度iPadを導入する予定のため、インタラクティブな取り組みが容易になってくると想定される。個別最適な取り組みが全学校でできるように進めていきたい。
<p>東京都の学校教育に関する計画には、障がいのある子どもへの教育に音声発信や文字拡大などのICT技術を活用することが記載されていたが、本市の計画では示されているか。</p>	<p>本市の計画で示すまでには至っていない。これまでの取組例として、目の不自由な子どもに対して紙ベースの拡大教科書を活用していたものをデジタルで拡大できるようにしたり、パソコンで音声を読み上げる取組みなどがある。ICTを活用することで支援教育をより充実させていくことが可能になるので、計画で示すことができるかについて検討していきたい。</p>
<p>中学校では、SAMRモデルのMRをめざしていく段階において、AIDリルを引き続き使いながら、知識技能を定着させるための時間を効率化するとの説明であったが、小学校でAIDリルを引き続き使わなくてもよいという理由について、もう少し詳しく説明してほしい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ AIDリルのこれまでの2年半の活用の成果を見ると、中学校に比べて小学校の活用率が低い傾向にあるにもかかわらず、令和6年度の全国学力・学習状況調査の結果をみると、小学校では国語が府平均を上回るとともに、算数においても府平均に近い数値となった。 ○ 小学校においては、全国学力・学習状況調査で求められる、知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等を育む授業改善が進んできているため、授業改善の時間を生み出すツールであるAIDリルではなく、他のデジタルドリルや紙ドリルで対応できると分析している。
<p>令和7年度からAIDリルの費用を市で2年間負担するという考え方を示されているが、その後についてはどのように考えているのか。</p>	<p>これからの2年間で、AIDリルを活用した授業改善がどれだけ進み、学力の向上がみられたかを検証することが重要。その検証結果をもとに、令和9年度以降も継続して活用する価値があるかどうかを検討していきたい。</p>
<p>意 見</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校で紙ドリルとAIDリルを併用することは、ICTに適した活用方法を検討した結果ではないか。すべてをICT化すればいいというものではなく、ICTを生かせるところは導入し、従来の教え方がいいのであればそれを持続したほうがいい。 	

4. 教員の働き方改革に資する展開

- ア)教育データを活用したダッシュボードの構築
- イ)学習評価や成績処理、調査統計等への回答でのさらなる事務軽減
- ウ)生成AIの利用でさらなる業務負担軽減

質 問	回 答
子どもの情報は多いほど様々な見立てができるようになるが、一方で、職員同士が情報を共有することが大変になってくる。ダッシュボードで解決できるのか。苦勞して入力した情報が活用できていないと意味がないので、どのように活用するか教えてほしい。	<ul style="list-style-type: none"> ○ ダッシュボードにより、いろいろなデータを集約し、一元化することで、教員間での情報共有がしやすくなる。 ○ 表示される数値が事前に設定した数値を超えた場合、警告を発する機能があり、見落としを防ぐことができる点が有能な機能であり、課題に対し迅速な対応が可能となる。
ダッシュボードで多くの情報を共有するだけで終わるのではなく、個別のファクターをどのように評価して、支援につなげていくかというのが課題になってくるのではないか。	情報の評価をするのは、A Iではなく人間の役割。リスクの評価は、福祉関連であれば、スクールソーシャルワーカー、心理データにはスクールカウンセラーといった専門家を含めたケース会議等で行う。教員のスキルも当然上げていかないといけないので、専門家と一緒に考えていく中で判断できるようになってほしい。
現場の教員の声を一番大事にし、紙での調査等は思い切ってなくすなど、学校と教育委員会事務局とのやりとりを減らせるよう、教育委員会が思い切って決断することが大事。	子どものアンケートについては、Google Formsを活用し、教員が集約しなくてもグラフを作成できるなど活用が進んでいる。
子どもの情報を整理するという意味でも、ダッシュボードでの一元化は働き方改革になる。学校からのお知らせなどができるポータルサイトはあるのか。	学校からのお知らせ等はGoogle Classroomで一定対応ができています。ダッシュボードの活用が進めば、教員だけではなく、保護者や子どもたちに向けての活用も可能になってくる。
他の国に比べ日本の教員の勤務時間が多いといわれているが、このような取組みにより勤務時間はどの程度軽減できるか。なぜ、他の国は勤務時間が少ないのか教えてほしい。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勤務時間の削減については、校務支援システムを導入した際、職員の勤務時間を管理できるようにしており、これまでの取組みの中で時間は縮減している。ただ、現状、導入による縮減はどの程度になるか見込めていない ○ 日本の教員は授業だけでなく生徒指導など、総合的な教育を担っているが、海外では教員の主な役割が授業に限定しているところがあり違いがでている。
教員の働き方改革に生成A Iが使われる可能性があることは分かったが、子どもが利用する際の留意事項とはどのようなものか。また、生成A Iを具体的にどのような場面で活用できると考えているか。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 生成A Iは指示文の工夫で、より確度の高い結果が得られるとともに、今後更なる精度の向上も見込まれているが、回答は誤りを含む可能性が常にあり、時には、事実と全く異なる内容や、文脈と無関係な内容などが出力されることもある。最後は自分で判断するという基本姿勢が必要となることや、回答を批判的に修正するためには、対象分野に関する一定の知識や自分なりの問題意識とともに、真偽を判断する能力が必要となること、A Iに自我や人格はなく、あくまでも人間が発明した道具であることを十分に認識する必要があることなどを、子どもに十分に理解させたうえで活用する必要があると考えている。 ○ 活用場面としては、生成A Iと英会話の練習をしたり、グループの考えをまとめたり、アイデアを出す活動の途中段階で、生徒同士で一定の議論やまとめをしたうえで、足りない視点を見つけ議論を深める目的で活用すること等が考えられる。

和泉市学校教育情報化推進計画(案)

令和7年〇月
和泉市教育委員会

第1章 計画策定に当たって

頁

- (1) 計画策定の目的 4
- (2) 今後の教育に求められる姿 5
- (3) めざす学校教育の姿 6
- (4) 今後の教育に求められる授業 7

第2章 計画の内容

頁

- (1) 和泉市の学校の情報化に係る現状 9
- (2) 基本的な方針 10
 - ①ICTを活用した児童生徒の資質・能力の育成 11
 - ②教職員のICT活用指導力の向上 13
 - ③ICTを活用するための環境の整備 14
 - ④教職員の働き方改革 16
- (3) その他の留意事項 18

参考資料

頁

- 【和泉市版】ICT活用SAMRモデル 19



和泉市学校教育情報化推進計画

第1章 計画策定にあたって

(1) 計画策定の目的

1. 「学校教育の情報化の推進に関する法律」(令和元年公布・施行)第9条において、学校教育情報化推進計画の策定が努力義務化。
2. 令和7年度から令和11年度を期間とする計画を策定することにより、本市の学校教育における情報化の推進に係る今後の方向性を中心に、具体の取組みイメージを共有する。
3. 学校教育情報化推進計画に基づく新たなICTの取組みを推進することで、現行の学習指導要領において学習の基盤となる資質・能力として位置づけられている「情報活用能力」の育成を図る。
4. その他、ICTの取組みにより教員、保護者の利便性向上にもつなげる。

(2) 今後の教育に求められる姿

同質性・均質性
一律一様の教育・人材育成

一斉授業 **形式的平等主義**
みんな一緒に みんな同じペースで みんな同じことを



測りやすい力 **自前主義** **社会的・文化的バイアス**

重視
限られた時間で
自らの記憶や思考
だけを頼りに
素早く正確に解く
力を評価

学校種、学校、
学年、学級、教科
などの縦割り
構造に基づく
教育の提供

学びや進路の
選択を制約する
バイアスの存在
(女子の文理選択、
直線的な進学だけ
が選択肢)

同調圧力
正解主義
価値創造やイノベーション創出の
最大の敵

多様性を重視した教育・人材育成

個別最適な学び **協働的な学び**

それぞれのペースで自分の学びを 対話を通じた「納得解」の形成



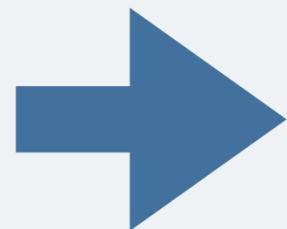
探究力重視 **社会とシームレスな協働体制** **子供の主体性**

自ら学びを調整し、
社会に生きる学び
や試行錯誤しながら、
自ら課題を設定し
課題に立ち向かう
「探究力」を評価

社会や専門的な
力を入れて、
一人ひとりの特性
を重視して、その
力をさらに伸ばす
体制

大人の成功体験
や経験にとらわれ
ず、子供の好奇心
や個人の興味・関
心に応じた学びや
進路選択の実現

内閣府 Scociety 5.0の実現にむけた教育・人材育成に関する政策パッケージより引用



実現にはICTを活用した教育の実践が必要不可欠

(3) めざす学校教育の姿

2020年代を通じて実現を目指す学校教育
「令和の日本型学校教育」の姿

＼全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現／



- ✓ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」が一体的に充実されている
 - ✓ 各学校段階において、それぞれ目指す学びの姿が実現されている
- # 個別最適な学び # 協働的な学び
主体的・対話的で深い学び # ICTの活用



- ✓ 環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている
 - ✓ 子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている
 - ✓ 子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている
- # 教師の資質・能力の向上 # 多様な人材の確保 # 家庭や地域社会との連携
学校における働き方改革 # 教職の魅力発信 # 教職志望者の増加



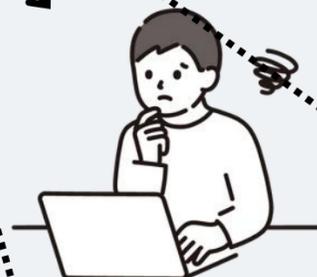
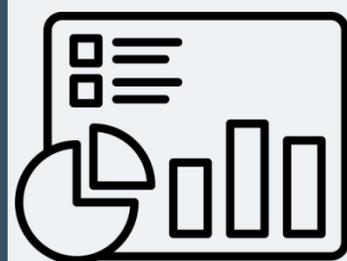
- ✓ ICT環境の整備により全国の学校で指導・支援の充実、校務の効率化等がなされている
 - ✓ 新しい時代の学びを支える学校教育の環境が整備されている
 - ✓ 人口減少地域においても魅力的な教育環境が実現されている
- # ICT環境の整備 # 学校施設の整備
少人数によるきめ細かな指導体制

(4) 今後の教育に求められる授業

教員は子どもの状況を把握し、指導や支援

クラウド上で課題の進捗を把握。適宜フィードバックや支援を行い学びを促進。

子ども作成物や教材などをクラウドで共有。子ども同士や教員がいつでも参照可能

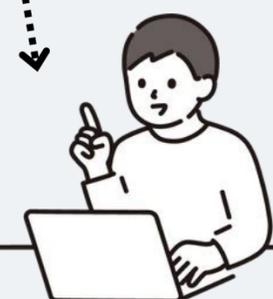


子どもが主体的に端末を使う **複線型**

子どもが自己決定し端末を活用



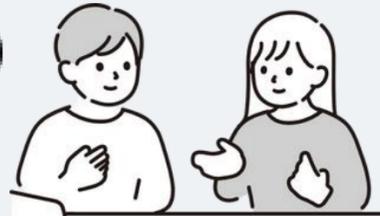
子ども同士もクラウドでつながる



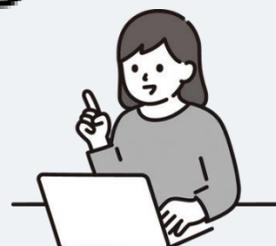
何度もインプット
何度もアウトプット



教員と相談したい子どもは集まる



協働で課題解決



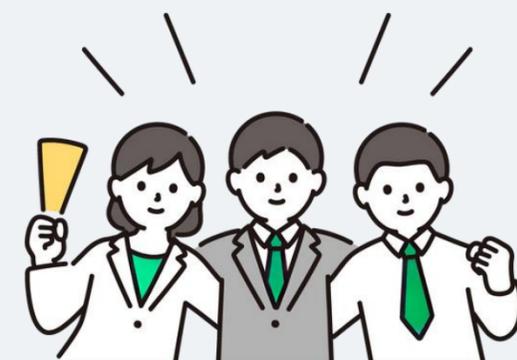
進められる子どもは発展的な課題を設定



直接の指導・支援



学校外での学習の支援



和泉市学校教育情報化推進計画

第2章 計画の内容

(1) 和泉市立学校における情報化の現状

01 1人1台端末導入による教育改革と学びの進展

- 当初は端末を「使ってみる」ことから始まり、現在は「日常的な活用」に進み、授業支援ソフト等を使用したプレゼンテーションなどを行っています。
- 教員の指示で1つのファイルを同時に編集し、学びを進めています。
- 各学校では、作成した情報活用能力体系表に基づき、ScratchやViscuitを活用してプログラミング等の学習活動を進めています。

03 新たなICT学習環境の充実

- 令和2年度に導入した1人1台端末は耐用年数が迫り、起動や動作、充電に課題が出ています。
- 現在のコンピュータ教室の機器は令和6年度末にリース期間が終了し、返却予定であるため、コンピュータ教室は廃止します。(槇尾学園と(仮称)富秋学園にはコンピュータ教室を設置しません。)
- 1人1台端末の整備により、コンピュータ教室の活用方法を再検討する必要があります。
- 市内全学校に設置した50インチモニターは耐用年数が迫るとともに、画面が小さく、教室の端からでは見えにくい子どももいます。

02 教員のICT活用に係るスキルの充実

- 1人1台端末の整備が進み、すべての教員にICTを活用して指導する能力が必要となっています。
- 令和5年度に実施した外部有識者による学校支援、GIGAスクール推進事業は一定の効果が見られています。
- 各学校に月3回訪問するICT支援員のニーズは非常に高まっており、今後も重要性が増していきます。

04 デジタル化による教育現場の効率化と改革

- デジタル採点システムを導入し、採点業務の大幅な業務改善が進みました。
- 保護者がスマートフォン等で欠席連絡できるデジタルツールを導入し、業務効率を改善しました。
- 令和5年度の校務用端末更新により、校務系と学習系ネットワークを統合し、校内のどこでも校務用パソコンを操作できるようになりました。
- 校務支援システムやMicrosoft Teamsを活用し、職員会議や研修におけるペーパーレス化を進め、業務効率を向上させました。

(2) 基本的な方針

情報化推進の観点

01

1人1台端末導入による教育改革と学びの進展

- 1人1台端末を用いた、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を実現
- 学習者主体の授業に転換

02

教員のICT活用に係るスキルの充実

- 学校間や学年間、教員間が最新のスキルを研究
- ICT支援員を含めた学校支援・教員支援の継続

03

新たなICT学習環境の充実

- 1人1台端末やモニターなどの適切な更新
- コンピュータ教室の今後のあり方について検討

04

デジタル化による教育現場の効率化と改革

- さらなる効率化と負担軽減のため、働き方改革を支援
- 情報の集約と分析を行い、教育データの活用が必要

基本的な方針

(1) ICTを活用した児童生徒の資質・能力の育成

- 情報活用能力を育成し、授業デザインを研究します。
- 学習者主体の授業に転換し、ICTを活用した学びを研究します。

(2) 教職員のICT活用指導力の向上

- 教員が学び続ける環境を整えます。
- 今後の教育に求められる授業の姿をとらえ、子どもが自律した学習者になる授業を推進します。

(3) ICTを活用するための環境の整備

- 子どもたちがより使いやすい端末を整備し、教育DXの促進を図ります。
- 子どもたちが学びの主体となる空間を創造します。

(4) 教職員の働き方改革

- 業務の内容を見直し、デジタルの力も生かし、教職員が効果を実感できる校務効率化を促進し、教職員が子どもと向き合う時間を確保し、教育の質の向上をめざします。

①ICTを活用した児童生徒の資質・能力の育成

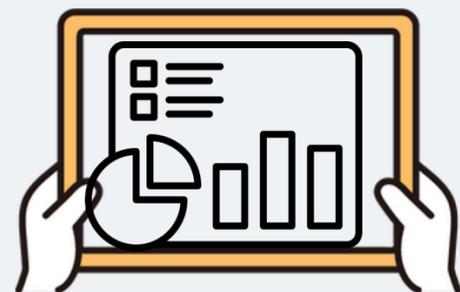
施策の方向性

1 適切な学習用アプリの活用

- 課題配付や画面配信ができる授業支援アプリ、共同編集を促す学習支援アプリ、基礎基本を繰り返し学習できるドリルアプリの活用を進め、「個別最適な学び」「協働的な学び」を実現します。
- ICTを最大限活用し、デジタルの強みを生かした学びを推進し、小学校では学習用デジタルドリルアプリ、中学校ではAIドリルを継続して使用します。

2 教育ダッシュボードの構築

- 教育データを効果的に活用し、子どもが主体的に学習できる取組みを推進します。
- 子どもが、自らの学びを振り返り、広げ、伝えることが可能になるダッシュボードの構築をめざします。

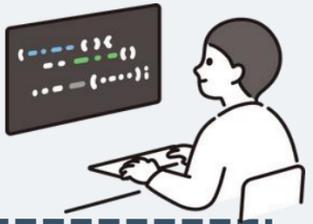


①ICTを活用した児童生徒の資質・能力の育成

施策の方向性

3 情報活用能力の育成

- 子どもたちが「楽しい」「役に立つ」と感じられるプログラミングの授業を展開します。
- 子どもたちが学び方を習得し、自律した学習者となるために必要な「学びスキル」、子どもたちが文房具の1つとして、1人1台端末を活用する「ICTの基本操作スキル」、情報を安全に活用するために必要な「情報モラル・情報セキュリティ」、論理的思考力を身に付けるために必要な「プログラミング」による情報活用能力を育成します。



4 誰一人取り残さない学びの保障

- オンライン授業などICTを用いて不登校の子どもや教室に入りにくい子ども、病気療養中の子ども等の学習機会を確保します。
- 障がいのある子どもや日本語指導が必要な子どもに対して、ニーズに応じたツールやアプリ等を組み合わせた支援を行います。

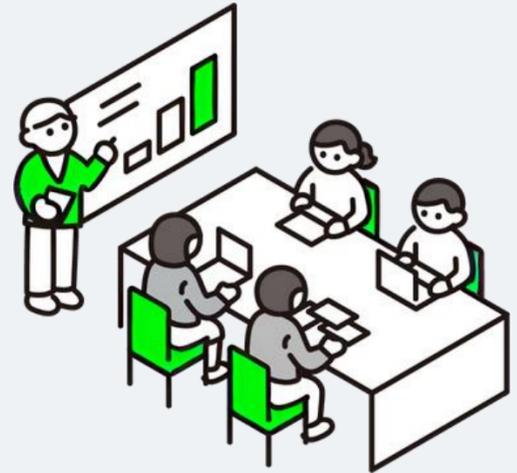


②教職員のICT活用指導力の向上

施策の方向性

5 専門家を活用した学校間格差の解消

○専門家が各学校をアセスメントし、課題を明確にした上で、実態に応じた助言改善策を提案する「GIGAスクール推進事業」を複数年かけ市内全校での展開をめざします。

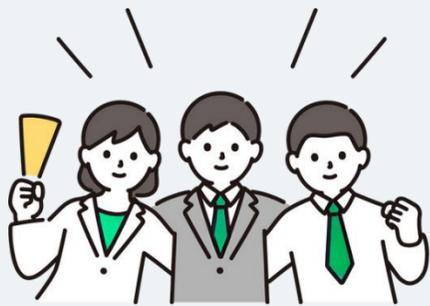


6 ICT支援員による学校支援を拡充

○ICT支援員の学校訪問の日数をさらに拡充することをめざします。

○教員とICT支援員が一つのチームとなり、学校がめざすこれからの授業の姿を共有します。

○ICT支援員も授業改善に向け提案を行います。

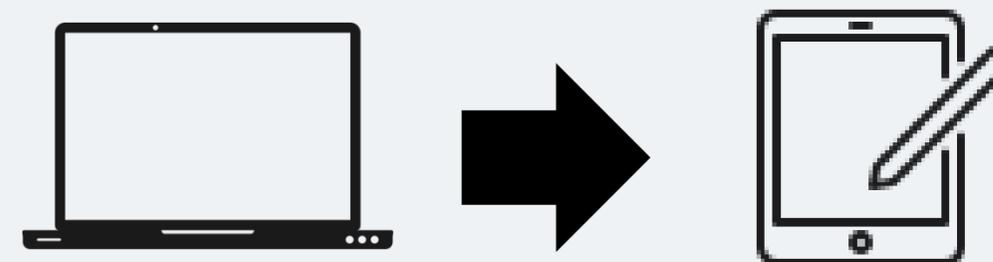


③ICTを活用するための環境の整備

施策の方向性

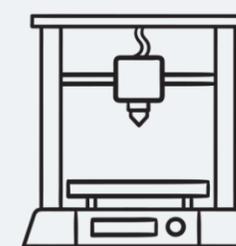
7 子どもたちの使いやすさを重視した1人1台端末の活用

- 実現したい学びの姿に向け、GIGA第2期ではiPad OSを採用します。
- めざす授業の形に沿った1人1台端末の活用を促進します。



8 コンピュータ教室の位置づけを刷新し、さらなる発展へ。

- 高性能PC、3Dプリンター、ドローンの配備をめざし、より発展的な学習活動を可能にします。
- コンピュータ教室をアクティブラーニンググループへ再整備をめざし、子どもたちが主体的な学びをさらに進める空間を創造します。



③ICTを活用するための環境の整備

9 端末の画面を投影する装置の整備

○電子黒板機能の導入も視野に入れ、画面サイズを大型化します。

○ホワイトボードに投影する天吊りのプロジェクタを設置することをめざします。

榎尾学園のプロジェクタ



小学校の現状



中学校の現状



電子黒板

黒板＋プロジェクタ

ホワイトボード＋プロジェクタ

④教職員の働き方改革

施策の方向性

10 教育データを活用したダッシュボードの構築

○学校に散在するデータを一つにまとめ、可視化できるダッシュボードを構築し、効率的な業務推進につなげます。

○学校が保有する校務系データと市長部局が保有する福祉系データを活用した、効率的かつ効果的な子ども支援のプロセスの構築に取り組みます。



11 事務作業のさらなる効率化

○ICTの活用により、学習評価や成績処理、学校行事の準備や運営、進路指導事務、学校通信等の作成、関係機関へのアンケート回答等の事務作業を効率化します。



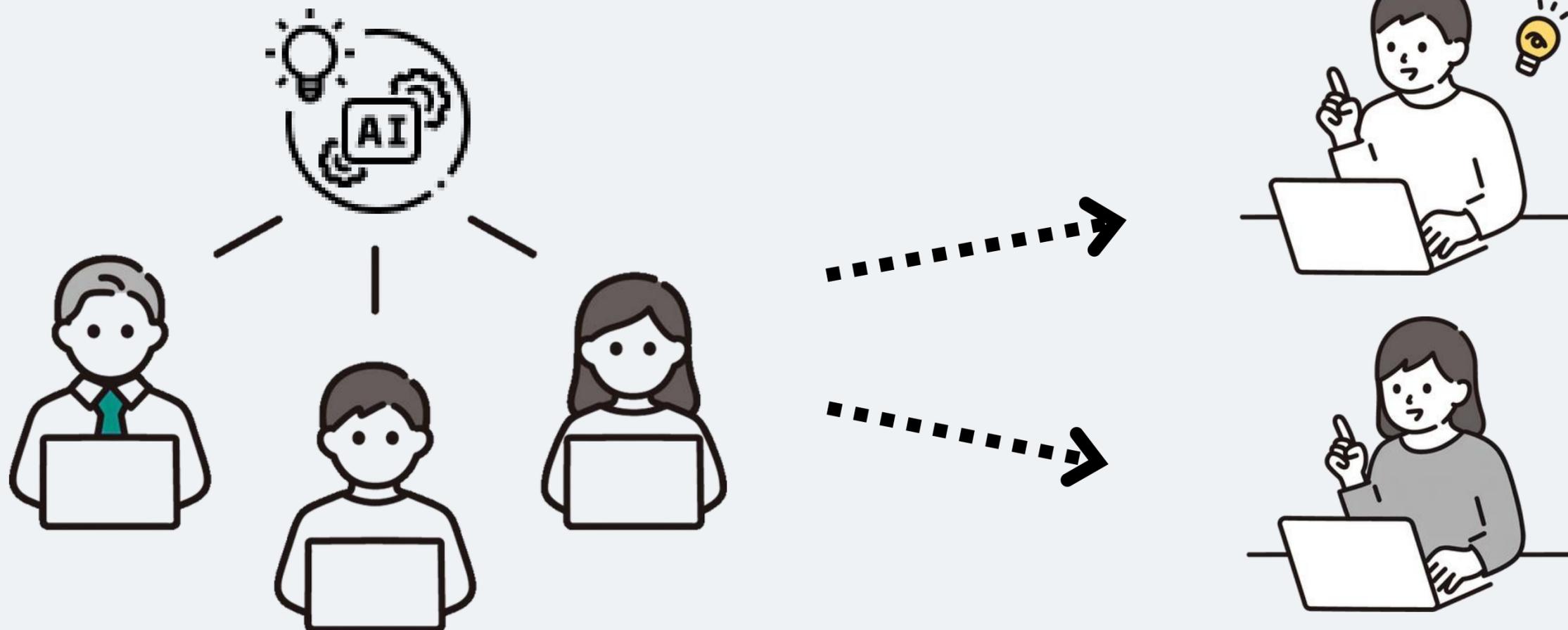
④教職員の働き方改革

施策の方向性

12 生成AIを活用した業務の効率化

○文部科学省のガイドラインを踏まえ、教職員が校務で生成AIを利用することで、業務効率の向上をめざします。(ex:小テストや学級通信などのたたき台、日程調整や感想の集約等)

○子どもの生成AI利用に当たっては、慎重に研究を進めます。



(3) その他の留意事項

1: 学校と教育委員会事務局間のデータ連携の強化

○教育委員会事務局の指導主事も学校教員と同じ校務支援システムを活用し、情報の共有化を図ります。

○教育委員会事務局は学校におけるICTの活用状況の把握に努め、情報の共有、システムの改良の意識を保持します。

2: 保護者とのコミュニケーションツールの充実

○保護者からの連絡について、就労環境や相談内容の多様化に鑑み、相談体制にICTを活用することも検討していく必要があります。

3: 学校図書館のデジタル化、市立図書館とのデータ連携

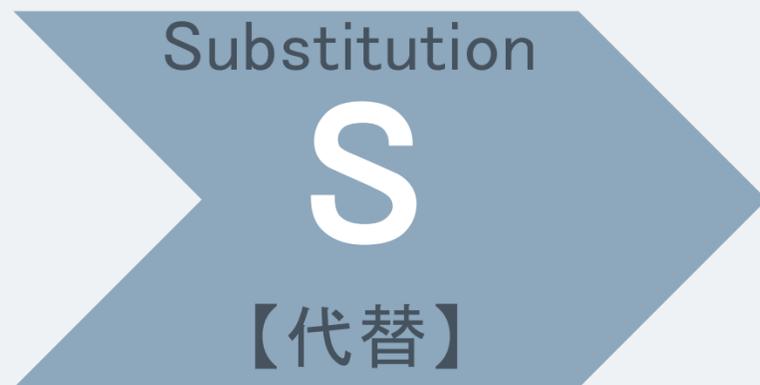
○榎尾学園には、将来的な市立図書館との連携を見越したシステムを導入しています。

○令和9年に開校を予定している(仮称)富秋学園では、学校図書館の地域開放も計画しており、市立図書館とのデータ連携についても関係部局と協議を進めています。

○他の学校においても、データベース化、市立図書館との連携等の研究を進めます。

4: ICT活用による子どもの健康面への影響に関する配慮等

○子どもの健康面への影響に関する配慮等については、ICT機器の画面の見えにくさの原因やその改善方策、姿勢に関する指導の充実など、学校と家庭が適宜情報共有を図った上で、両者が連携して取り組む必要があります。



アナログでできていたことをデジタルで代用

教師が

- ・モニターに提示する
- ・デジタルドリルを配付する
- ・教材動画を見せる
- ・課題を配付・回収する

など



デジタルの特性を活かし学習効果を増大

教師が

- ・考えの共有を促す
- ・共同編集をさせる
- ・コメント機能で相互評価させる
- ・推敲などの試行錯誤をさせる

など



授業デザインが変容し新たな学びの実践

子どもが

- ・学習や発表の手段を自己決定する
- ・学習ログを積み重ね、振り返る
- ・相互評価し、フィードバックする
- ・活用場面を決める

など

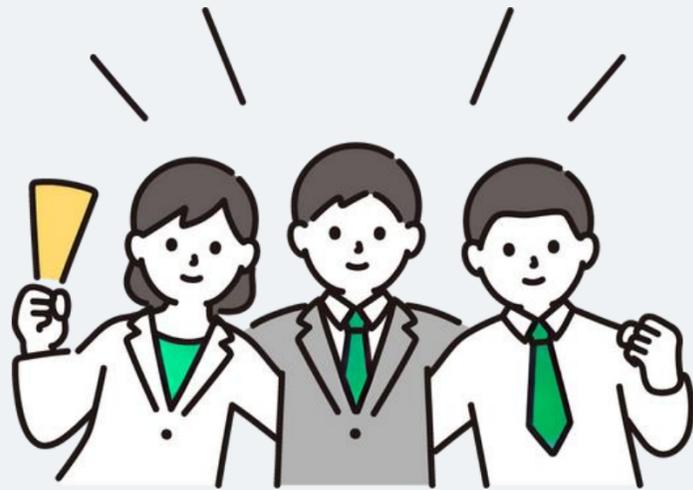
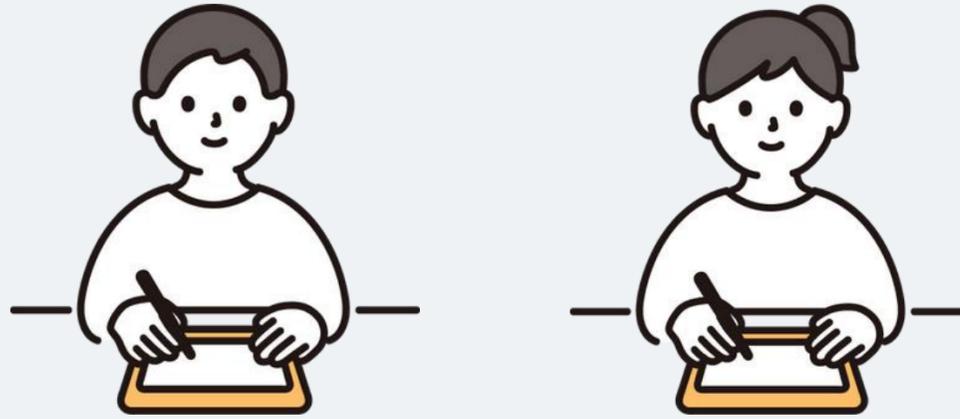


子ども中心の学び・実社会へとつながる学びへ

子どもが

- ・興味関心に基づいた課題を設定する
- ・最新テクノロジーを積極的に活用する
- ・学習成果と実社会の課題をつなげる

など



和泉市学校教育情報化推進計画

-Izumi City School DX Plan-

令和7年〇月

和泉市教育委員会事務局
Izumi City Board of Education